特261
A5

邯鄲
殺生石
野宮
錦木
唐船

内二十

始

特261/85

邯鄲

世阿彌元清作

曲柄　四番目（略初能）
季節　不定
時古順　二　秘
所　支那河北省大名道邯鄲ノ里

梗概

唐土楚國に盧生（シテ）といへる者、楚國羊飛山に聖僧の住まゐる由を聞き、悟りの道を得んと旅立ちける途すがら、邯鄲の里に一宿を求め、不思議の枕を借りて一睡せしに、突如として楚國より王位を讓らるべき勅使（ワキ）來り、玉の輿に乘せて都へ導き行きぬ。その宮殿の善美を盡したる、寂光の都喜見城もかくやと想はるゝばかりなり。やがて大臣（ワキツレ）進み出で、御在位既に五十年なれども、上の仙藥を聞し召さば、御年一千歳を保ち給はんと、天の澆槃　濕の盃を捧ぐ。盧生卽ち酒宴を催せば、童子（子方）立ちて舞ひ、晝夜となき樂しみに、自らもうち興じて樂を奏しぬ。さる程に宿主粟飯の調ひたる事を告ぐれば、盧生の夢は忽ちに消え失せ、今まで宮殿樓閣と見しは邯鄲の假の宿、五十年の榮華は粟飯一炊の間に外ならざりき。盧生こゝに豁然として何事も夢の世と悟り得て、この枕こそ善知識なれと喜びて歸りけり。

謠ひ方

不思議の仙術に依り、人生の行路夢幻を知らせる作にして、全曲最も變化に富み、前後は愼重幽靜の位を持し、中間は夢に帝位に登りたるなれば、壯麗なる活動を要す、そして落ちらず、老ゆるなく、活潑なるべく、老巧ならざるべからず、又緩急の多きを忘るべからず。

△**シテ**　次第の謠ひ出しは、餘り位を取らずに、すらりと出で、返しを稍重めに、サシは確かりと、道行は朗らかに、扨はこれなるが」と抑へめに出で「一村雨の」と寛たりと「そもいかなる者ぞ」と調子抑へめに「思ひよらずや」と落着いて「ここはそも」と王位に卽きし心持にて、以下段々と愼重に「東に三十餘丈に」と帝の位にてたつぷりと「そも天の澆槃とは」以下ワキツレとの掛合は、品位を保ち重んもりと「いつ迄ぞ」と伸んびりと花やかに「月人男の」と乘らずにさらりと「喜びの歌を」と寛たりと「謠ふ夜もすがら」より乘つて、以下地との掛合は花んなりと、段々と運んで「盧生は夢さめて一

と一息置きて、前とは全然氣を替へ、閑かに調子を低めてしやかに謠ひ出し、以下地との掛合もしつとりと、段々と稍運びめに「つらつら人間の」と改める心にて又しつとりと「南無三寶」と悟りを開きし心なれば、かけて稍はつきりと、剛柔吟を目立たぬ樣に謠ふ。

△子方　只一句なれども、花やかにさらりと謠ふ。

△ワキ　勅使なれど位を持たず、さらりと謠ふ。

△ワキツレ　ワキと殆んど同じ位にてさらりと謠ふ。

△地　初同はシテの調子を受け寛たりと「玉の御輿に」と閑かに「不思議なる」ととくと閑め「ありがたの」と調子を元へ戻して閑かに、返しより段々と運んで「千顆萬顆の」と氣を替へさらりめに「銀の山を」とシテの位を受け健實に「國土安全長久」の以下運びよく「菊の白露」より榮華の心にて引立てゝ「あるべき」ととくと閑め「なほ幾久し」と乘つてさらりと、以下シテとの掛合はさらりと、漸々と運び能く「四季折々は」より充分に氣を掛け進む心にて、「かくて時過ぎ」と氣を替へ少し閑めて、返しよりさらりと進んで「覺にけり」と閑めずに謠ひ切り「盧生は夢さめて」と前と全く別の調子にて、シテの謠を受け、充分に調子を抑へて、淋しく閑かに「百年の歡樂も」以下稍運んで「けに」と抑へて「何事も」と別に出し少し閑め「よくよく思へば」と調子を常の如く改めて寛たりと、留を閑めて謠ひ納む。

能の異式（小書）

藁屋　―　裝束が唐帽子、着流しと變り、作り物も藁屋となり、樂は盤渉となる。

夢中醉舞（むちうすゐぶ）　―　黑垂に唐帽子、法被着流しとなり「白雲の上人となるぞ」と臺を下り寃きて掛絡を取り、來序無しに「有難の」と成りて直して坐る、樂は二段オロシより地となり靜かに坐して「いつ迄ぞ」と謠ひ出し、以下形も坐したるまゝにて切に臺を下り「智識は此枕なり」と枕を取り狂言に渡す。

語　釋

蜀の國　―　支那四川省成都府。

羊飛山　―　支那四川省夔州府にあり、大明一統志七十卷に、「四川夔州府羊飛山在二萬縣西南五十里一相傳昔有レ人學二道于此一常養二羊一忽一日戒二童子一云勿レ放レ羊　童子放レ之一羊沖レ天而去因名矣」とあるによる。

邯鄲の里　―　支那河北省大名道にあり。今盧生の祠あり。

身の一大事をも云々　―　一大事とは法華經方便品に、「唯以二一大事因緣一故出二現於世一」とあるをいふ。

野くれ山くれ里暮て　―　長明海道記に、「十日豊河を立つて野くれ里くれはるゞ〳〵過れば峰野の原といふ所あり」云々とあるによつて見れば、野くれ山くれとは旅行の急ぐ體をいふ。

さてはこれなるは聞及にし邯鄲の枕　―　枕中記に、「其枕青磁而兩の端に竅あり呂翁囊の中より出して盧生に授く」とあり。

榮花の花も一時　―　白氏文集に載す、放言詩、「泰山不レ要レ欺二毫末一、顏子無レ心羨二老彭一、松樹千年綠是朽、槿花一日自爲レ榮、何須戀レ世常憂レ死、亦莫二嫌レ身漫厭レ生、生去死來都是幻、幻人哀樂繫二何情一」とあるを引きて用ゆ。

雲龍閣　―　唐土天子の居所名。

阿房宮　―　秦始皇の住みし宮廷。

寂光の都喜見城　―　盧生が夢中の歡樂は寂光の都又は喜見城の樂に等しとの意、寂光の都とは、名義集に、「常寂光卽妙覺所居」とあり、又觀普賢菩薩行法經に、「時空中聲卽說二是語一釋迦牟尼佛名二毗盧遮那遍一切處一其佛住所名二常寂光一」と說き、天台四敎義に、「破二一品微細無明一入二妙覺位一永別二無明父母一究竟登二涅槃山頂一　諸法不レ生般若不レ生　不生名二大涅槃一以二虛空一爲レ座、成二淸淨法身一居二常寂光土一卽圓敎佛相也」と說明してある。喜見城は帝釋の居城、三界義に、「忉利天者亦名二三十三天一（中略）山頂有レ宮名二喜見城一亦名二喜見城一」云々とあり。

天に色めき地にひゞく雷の聲も云々　―　莊子齊物に、「汝聞二人籟一而未レ聞二地籟一汝聞二地籟一而未レ聞二天籟一人籟則比竹是已地籟則衆竅是已天籟則人心自動是已矣」とあり、卽ち天に色めきとは上の旗のあし色めくをいひ、地に響く雷とは雷にあらず是は籟なり地籟のことなり。

長生殿のうちには春秋を留めたり　―　朗詠集に載す盧藏保胤の詩句、「不老門日月遲」とあるをさす、長生殿も不老門も共に皇居の名なれば萬歲を祝して云ふ、萎老に歸しあれば參照すべし。

てんのこんづ　―　天の漿の意、卽ち漿はつくりみづと訓ず、陳嘉謨本草に、「漿酢也炊二粟米一熱投二冷水中一浸五六日味酢生二白花一色類レ醬故名」とあり、又觀無量壽經に、「瓔珞中盛二蒲桃漿一蜜以上レ王」とあり。

かうがいのはい　―　沆瀣の盃と書く、沆瀣は海の氣なりと辭書に見ゆるが、仙家の盃といふ事未だ考へず。

まさり草　―　菊の異名、藏玉集に載す歌に、「すへきの萬代までにまさり草たましいたねを植しきく」とあり。

菊衣　―　表白く裏紫なるをいふ、禁裏政要に、「菊衣十月十一日晴着二用之一菊色々在二人情一」とあり。

わが宿の菊の盃けふごとに云々　―　拾遺集第三卷秋歌に載す淸原元輔の歌、菊にをくはかなき露、年々の九月九日毎につもり〳〵て幾世にならば淵ともなるべきぞと末長き事をいふて祝の歌とし、「わが宿の菊の白露けふ毎に幾世つもりてふ

ちとなるらん」と詠む、奥義抄に、「仙宮の菊の露つもりて淵となる事のある也」と記せり。

甘露もかくやらん ― 諸天不老の神藥をいふ、博物志に、「甘露は天酒也其凝如二脂其如レ飴」とあり、又維摩經註に、「曰諸天以二種々妙藥一著二海中一以二寶山一摩レ之令レ成二甘露一食レ之得レ仙名二不老藥一」とあり、又華嚴掬玄記に、「曰甘露有二四義一一除レ渴如レ水二一遺レ飢如レ食三療レ病如レ藥四生レ樂如レ密」とあり。

女御更衣 ― 天子の侍女、我國中古の定めは皇后中宮、次に女御、次に更衣とあり、岷江入楚に、「如何なる親王攝家の女も直に后になり給ふことなく、先女御入内とて參り給ふ、扨可レ然人は聽て后に立つなり是を中宮といふ、又其外の女御にてある人も第一の皇子など生れ給ひて春宮などに立せ給へば如何なる女御も后に立つなり」、日本紀に、「雄略天皇七年求二雅媛吉備上道女一爲二女御一是始也」とあり、更衣は女官の名、天子御衣を召かへらるる役なり。河海抄に、「仁明天皇承和三年正五位上紀朝臣乙魚女授二從四位下一柏原天皇更衣也是始也」とあり。

間狂言 邯鄲の宿主。

(口開) 是は唐土邯鄲の里に住む者にてさむらふ。わらは邯鄲の枕とて。奇特のあるを持ち參らせて候。是は一年世仙の法を行ひ給ふ旅人に。御宿參らせて候へば。その恩賞に賜りたるが。是に一睡まどろめば。越し方行く末の事を見る枕にて候間。若し御所望の方あらば。此方へ御入り候へや○(しかしかく)誰にて渡り候ぞ。いや御旅人にて候よ。先内へ御入りありてお腰を召され候へ。偖て是はいづくより何方へ御通りなされ候ぞ(しかしかく)それは何の爲の御出でにて候ぞ(しかしかく)さあらばわらは邯鄲の枕とて奇特のあるを持ち參せて候が。是に一睡まどろめば越し方行く末の事を見る枕にて候間。ちと御まどろみあつて御覽候へ(しかしかく)あれなる大床に御座候(しかしかく)其間に粟の供御を拵へ申さうずる。○如何に旅人御畫成り候へ。

本曲、まづ囃子方着座すれば、後見疊敷める引立大宮を持ち出で、舞臺脇座にこれを据ゑ、次に口開の狂言出で、抱けるを枕を臺上に置く

枕ある時は則ち邯鄲の宿にして、枕を除けば夢中の王宮樓閣となり、キリに到つて再びもとの宿にかへる

裝束附（邯鄲）			
シテ	盧生	面 邯鄲男 黒頭 黒鉢卷 襟淺黄	作物
		着附厚板唐織 半切 法被	一疊臺 宮引立
		繡紋腰帯 掛絡 數珠 唐團扇	
ワキ	勅使	着附段厚板 白大口 側次	
		繡紋腰帯 扇	
ワキツレ	農夫二人	着附厚板 白大口 繡紋腰帯 扇	
子方	舞人	風折烏帽子 襟赤 着附縫箔	
		白大口 長絹 繡紋腰帯 扇	
ワキツレ	大臣三人	洞烏帽子 着附厚板 袷狩衣	
		白大口 繡紋腰帯 扇	

素謡座席順

ワキツレキテ方

邯鄲

（紅葉口開）（伸ビヤカ遊ブ）

シテ盧生上ハ次オ

ツヨク 拍子ニ合

浮世の旅に迷ひ来て。浮世の旅に迷ひ来て。夢路をいつと定めん

サシ上ハ

シテサシ 拍子ニ合ハズ

これは蜀の國のかたはらに。盧生といへる者なり。われ人間にありながら佛道をも願はず。たゞ茫然と明かし暮らすばかりなり。まことや

詞 気ヲカヘ

詞 確カニ

楚國の羊飛山に。尊き知識のましま す由承り及びてい程に。身の一大事をも尋ねばやと思ひ。唯今羊飛山へと急ぎい（寛タリ）（切）

道行上り（閑カニ伸ンビリイ）（柏子二合）「佳み馴れし。國を雲路のあとに見て。（切）（元ヘ長シ）

のあとに見て。山を越え行けば（元ヘ長シ）（元）

そこともなき旅衣。（切）野暮れ山

くれ里くれて。名にのみ聞きし（元）

耶郡の。里にも（元）はやく着きにけり（元）

（閑カノ）里にもはやく着きにけり（元）

詞（閑カノ）「急ぎい程に。これはは（元）はや耶郡の里に着きて。未だ日は高くゆへども。この

所に旅宿せうずるにてい。いかに案

内申しい（狂言）「これは旅人にてい。一夜の

宿を御貸しゐへ（狂言）「これは蜀の國のかたはらに。廬生といへる者なり。われ人間にありながら佛道をも願はず。たゞ茫然と明かし暮らす處に。楚國の羊飛山に。尊き知識のまします由承り及びて。ゐ程に。身の一大事をも尋ねばやと思ひ立ち

てゐ（狂言）「さてその枕はいづくにぞ座ゐぞ（狂言）「さらば立ち越え一睡見うずるにてゐ。（狂言）「さてはこれなるが聞き及びにて郡鄲の枕なるかや。これは身を知る門出の。世の試みに夢の告。天の與ふる事なるべし（上歌）「村雨の雨宿り（同）「村雨の雨

宿り。日はまだ殘る中宿に。假寢の
夢を見るやと邯鄲の枕にふしに
けり邯鄲の枕に臥しにけり

ワキ勅使詞「いかに盧生に申すべき事のい
シテ同カニ「そも如何なる者ぞ「ワキ楚國の帝の
御位を。盧生に讓り申さんとの。
勅使これまで參りたり「シテ抑思ひよら

ずや王位にはそも何故にそなはる
べき「ワキ是非をばいかでばかるべき。
御身代を持ち給へ。その瑞相
こそまゝますらめ。はやはや輿に
召さるべし「シテ同カニカリメニこはそも何と夕露の。
光かやくまの輿乘りも習はぬ
身のゆくへ「ワキカル上ヒ「サラリ柏子合ハセ「かくべきとは思はずして

○小謡

シテ「天にもあがる心地して　上歌同　玉の帝輿
に法の道。玉の帝輿に法の道。榮華
の花も一時の。夢とは白雲の上人
地上　となるぞ不思議なる　眞之來序○「ありがた
の氣色やな。ありがたの氣色やな。
もとより高き雲の上。月も光は明
らけき。雲龍閣や阿房殿。光も満ち

満ちてげにも妙なる有様の庭には
金銀の砂を敷き。四方の門邊の玉
の戸を。出で入る人までも光をかざる
よそほひは。まことや名に聞きし寂
光の都。喜見城の。樂しみもかくやと
思ばかりの氣色かな。　歌　千顆萬
顆の帝寶の數を連ねて捧げ物。

千戸萬戸の旗のあし、天に色めき地にひゞく禮の聲も。おびたゞしく禮の聲もおびたゞし「東に三十餘丈に　同　銀の山を築かせては。黄金の日輪を出だされたり「西に三十餘丈に　同　黄金の山を築かせては。銀の月輪を出だされたり。たゞ〳〵これは。長生殿の内には。春秋をとゞめたり不老門の前には。日月を遲しといふ心をまなばれたり。「いかに奏聞申すべき事のゆ。御位につき給ひてはや五十年なり。然らばこの仙藥をきこしめさば。御年一千歳まで保ち給ふべし。さる程に天の濃漿や流灑の

盃。これまで持ちて參りたり「そも
天の濃漿とは「これ仙家の酒の
名なり「流離の盃と申す事は
ワキツレ詞「同じく仙家の盃なり「壽命は千
代ぞと菊の酒「榮華の春もよろ
づ年「君も豐かに「民榮え
上歌同 ○さめにけり 迄雜子 ○國ぞ安全長久の。國ぞ安全長久の。

○仕舞

榮華もいやまさりになほ喜びは
まさり草の。菊の盃とりどりに
いざや飲まうよ。「廻れや盃の
同 廻れや盃の。流れは菊水の流に引か
れて疾く過ぐれば。手まづ遮る菊
衣の。花の袂をひるがへしてさすも
引くも光なれや。盃の影のめぐる空ぞ

○小謡

久しき。子方上わが宿の。同わが宿の。菊の
白露けふごとに。幾代積りて淵と
なるらんよも盡きじよも盡き
じ藥の水も泉なれば。汲めども
汲めどもいやまさりに出づる菊水を。
飲めば甘露もかくやらんと。心も晴
れやかに。飛び立つばかり有明の

夜晝となき樂みの。榮華にも
榮耀にもげにこの上やあるべき。樂
シテ上いつまでぞ。榮華の春も。常盤
にて。地上なほ幾久しき有明の月
シテ月人男の舞なれば。雲の羽袖を。重
ねつ。悅びの歌を。謠ふ夜もすがら
同謠ふ夜もすがら日は又出でて。

○仕舞
羽袖を
そ廻シラウケで
浮ク様ニ引キ廻シ
サゲをニツマク

あきらけくなりて。夜かと思へば
シテ「晝になり、地上「晝かと思へば「月また
さやけし地上「春の花咲けば シテ中「紅葉
も色濃く地上「夏かと思へば シテ「雪も
降りて、同上 四季をりをりは国の
前にて。春夏秋冬萬木千草も。
一日に花咲けり。面白や。不思議やな

上歌 かくて時過ぎ頃去れば。かくて時
過ぎ頃去れば。五十年の。榮華も
盡きて。眞は夢の。中なれば。皆消
え消えと失せ果てぬ。ありつる邯鄲の
枕の上に。眠りの夢は。さめにけり。
シテ上「盧生は夢さめ
て。五十の春秋の。榮華も忽ちにたち

花然と。起きあがりて「さばかり多かりし」女御「更衣の聲と聞きしは」

シテ「松風の音となり」宮殿樓閣は「たゞ」

地「邯鄲の假の宿」「榮華の程は」「五十年」

地「さて夢の間は榮飯の」「炊の間なり」

地「不思議なりやはかり難しや」「つらつら」

「人間の有様を。案ずるに」同「百年の歡

樂も。命終れば夢ぞかし。五十年の榮華こそ。身の為にはこれまでなり。

榮華の望みも齡の長さも五十年の。歡樂も。王位になればこれまで

なりげに。何事も一睡の夢「南無

三寶南無三寶」同上「よくよく思へば出

離を求むる。知識はこの枕なりげに

ありがたや。那須野のげにありがたや。那須野の。夢の世ぞと悟り得て。望みかなへて帰りけり。

殺生石

佐阿彌安清作

曲柄　四、五番目（略二番目）
季節　九月
稽古順　四級
所　下野國那須郡那須湯本

梗概

玄翁（ワキ）といへる道人、奥州より都に上らんとて、下野國那須野の原に到りしに、一人の女性（シテ）出で來り、その石は人の命を失ふ恐ろしき殺生石なれば、立ち寄らせ給ふなと留む。玄翁その謂れを尋ぬれば、昔鳥羽院の上童に玉藻前といひし化生の者、終に顯れてこの原の露と消えしも、執心殘つて石となれるなりと語り、その身の石魂なることを告けて、石の中に隱れ去りぬ。（中入）

玄翁乃ち石靈に引導を授くれば、石は二つに割れて、玉藻前の靈（後シテ）野干の姿して現れ出で、天竺にては班足太子の塚の神、唐土にては幽王の后褒姒、わが朝にては玉藻前となつて王法を傾けんとせしに、安倍泰成に調伏せられ、狐となつてこの野に隱れ住みしを、又三浦介上總介に射伏せられしも、一念凝つて石となり、多年人の命をとりしが、今は御法を受けたれば、この後惡事をなすまじと誓ひて消え失せけり。

謡ひ方

玉藻の前の傳說なる、那須野の荒野中の怪石の靈なれば物凄くとも陰氣なるものにてはなし、鬼物として重きものに非ず、後半は惡靈なれば、充分に强味を持ち、力を籠め謡ふ、殊に切は確かりとたるみなく、雄壯に謡ふべきなり。

△**シテ**　里女なれど常の如く優しからず、和らかき內に强味を含みて、稍閑かに謡ひ出し、ワキとの掛合にも其心持にて、「そこ立のき給へ」とかゝつて確かりと、以下段々と運んで「仇を今」とはつきりと、サシは强吟にてさらりと、上端は確かりと「今は何をか」と稍强めに「あら恥かしや」と少し內へ取り「畫は淺間の」と手强く確かりと謡ふ。

△**後シテ**　前とは全然氣を變へ、手强く剛壯を旨として「石に精あり」と重んもりと謡ひ出し「風は大虛にわたる」と大きくたつぷりと「今は何をか」と手强く節をたつぷりと「われ王法を」より運んで「肝膽を碎き」とどつしりと「その後勅使立つて」「兩介は狩裝束にて」と二句は地より少し閑めて

謡ふ。

△**ワキ**　少し位を持つなれど、曲柄に對し餘り重くならぬ樣に謡ひ出し、名乘は落着いて、道行は朗らかに、シテとの掛合はさらりと强吟にて「木石心なしとは」と朗らかにたつぷりと「急々に去れ去れ」とイロにて大きく確かりと「自今以後」と稍閑かに「攝取せよ」と手强く大きく「不思議やな」とさらりと確かり謡ふべし。

△**地**　初同は餘り閑めずに、物淋しく謡ひ、クリより强吟にてさらりと、サシは運んで、クセも運び能くさらりめに確かりと、上端より朗らかに段々と進む心にて留めを閑め、「立ちかへり夜になりて」とどつしりと「恐れ給はで」より進む心に中入前をとくと閑め、後は「像を今ぞ」と乘つてさらりと進み「恐ろしや」と稍閑め「やがて五體を」と閑かにどつしりと出で（仕舞の時は此の返しを謡はず）「幣帛をおつ取り」より段々と運んで「その後勅使立つて」よりさらりと受け、餘り早くならぬ樣によく運び「兩介は狩裝束にて」以下滯りなく剛壯に「あるべからずと」とかけて大きく留を閑めて謡ひ納むべし。

能の異式（小書）

白頭　―　中入前の形が替り、後は作り物なく、幕の內にて謡ひ出し白頭に野干、白地狩衣、半切となり「二つに割るれば」と幕より走り出で、後の形も變り位も重くなり、謡も重くなり緩急多し。

語　釋

殺生石　―　海藏寺開山傳に曰く、「源翁禪師は相州海藏寺の開山なり。康治帝（近衛）の御宇に玉藻前あり。身より光を放つて殿階を照らす。帝こゝに於て不豫なり。安部泰成之を卜して曰く、これ玉藻の仕業なりと。忽狐と化して東國に逃る。帝は三浦介義明、千葉介常胤、上總介廣常に勅して、其狐を下野の國那須野にうたしむ。義明射て之を殺す。其後狐の靈石となる。世に殺生石といふ。其石に觸るれば鳥獸人民皆死す。民の苦しみ甚だし。時に僧大徹と云ふものあり。其石の怪を止めんと欲すれども能はず。寶治帝（後深草）源翁に詔して赴かしむ。翁いたり破竈墮の機緣を拈し、一偈を題し、柱杖を擧げて卓一下す。石忽破碎す。其夜一の女子現じて曰く、我淨戒を得て天に生ると、言ひをはつて烟の如くに沒す。此より翁の聲名洛鄙にしけり」とあるを基材として作りし故にかくいふ。

雲水　―　心を水とし身を雲とするの意にて、僧の廻國行脚するを雲水と稱す。

世上に眼をさらす　―　世の狀態を觀察すること。

冬夏をも結ばゞや　―　佛敎には冬期と夏期とに九十日間づゝ禁足して佛法修行する時期あり。之を冬安居、夏安居といふ。

心の奧を白河の云々　―　新續古今集第十四卷、戀歌四に載す、源滿元の歌、「へだてゆく人の心の奧にこそまた白川の關はありけり」とあるを引く。

那須の原　―　栃木縣下野國那須嶽の麓にして、那須黑羽町附近より福島縣境に亘る。東西六里、南北十里の廣漠なる原野。

上童　―　昇殿を許されたる女官。

鳥松桂の　―　白氏文集に、「梟鳴二松桂枝一、狐藏二蘭菊叢一」とあるをいふ。

畫圖の屏風　―　清涼殿東南の隅に立てたる四季の畫の御屏風をいふ。

萩の戸　―　清涼殿の北にある御殿の名。

勘狀　―　占ひ考へ、記して奉る書面。

衣鉢を授く　―　佛道を傳授する意。詳しくは衣は僧侶が著くるところの三衣、鉢は僧侶が施をうくるに用ひる應器卽ち鐵鉢をいふ。大智度論に迦葉の滅度を明すところに、「卽著二從レ佛所レ得僧伽梨一持二衣鉢一捉杖レ如二金翅鳥一上二是虛空一」とあり。されど此衣鉢の言は、禪宗などにては其祖が禪法の蘊義を其弟子に傳へて、法統を嗣がしむることをいひ顯はすに用ひらる。衣鉢を授く、又衣鉢を傳ふといへるが如きこれなり。達磨尊者が慧可に法を付囑するとき、傳法の證として衣と鉢とを授け、爾後祖々相傳付囑するを例としたるが如きこれなり。

石に精あり　―　非常の石にも尙精靈ありとの義。

野干　―　狐の異名。

斑足太子の塚の神　―　斑足は印度神話中の國王で、摩訶陀國に王たり、故にかくいふ。曾て其父、千の小國に王たる時、一日山を巡り獅子に値ふ。衆人皆迸散す。王其牝獅子と交る。後月滿ちて獅子殿上に來りて子を產む。養ふて之を太子となす。足上斑殿あり。人號して斑足と稱す。太子王位を紹ぐ。好んで人肉を食す。こゝに於て千の小國結びてこれを襲ひ、捕へて耆闍崛山に放つ。羅刹これを得て鬼王となし、還つて千小國王を捕へ、之を殺さんとす。中に須陀須摩王あり、斑足王のために四無常偈を說く。王此偈を聞き、ために空平等地の證悟を得、怨親平等の念を生じ、遂に諸小國王を放還せりといふ。仁王經に、「昔天羅國の王に一の太子あり。斑足太子と名づく。外道のために、千人の王の頭を取つて塚神を祭り、自ら父王の位に登るべしとの敎を受く。已に九百九十九王を得て一王をかく。卽ち一王を得たり、名を普明王と曰ふ」と說示してある。推知すべし。

幽王の后　―　幽王は周の王、褒姒は寵愛甚しかりし美人にて、此女のため國亂れて周終に亡びたり。始めは變化の捨子を、

父宣王路に拾ひて養ひたるなり。

玉藻に御幣 ― 神社考に此時の事を記して、「泰成宮に入つて玉藻前に御幣を持たしめ、泰成祝詞を宣る。玉藻前幣を捨てゝ去り、化して白狐となり、走つて下野國奈須野原に入つて、人を害する多し」とあり。

其後勅使立つて ― 簸簋抄に、「時に上總介、三浦介兩介に仰せて那須野に行いて獵す。彼狐を射んとすれども中らず、故に伊豆箱根若宮八幡に祈念す。其後の夢に、兩介に鏑矢を賜はり、百日犬を射習ふべしとあり。即ち百日稽古して彼狐を射とめて上洛す。彼野にて獵しける樣に、方八町に埒を結び、犬を入れて騎馬の仕度して之を射る。帝御覽あつて叡慮に備ふ。これ犬追物のはじめなり」とあり。

三浦の介 ― 海藏寺傳記には義明、神社考には義純とあり。

犬追物 ― 騎馬にて犬を追ひまはし射る法。

間狂言

ワキの能力。

誠に御急ぎなされたるにより。程なく下野の國那須野の原に着かせられた。いやありや〳〵〳〵。又ありや〳〵（ワキ）いやあれなる大石の上へ雁が喧ひ合ふて落ちまする。取つて參り晩のお料理に仕らふ（ワキ）けにと楚忽なる事を申して御座る。（中入後）やあら最前の女の有樣は合點が參らぬが。先あれへ參らう。さても唯今の物いふ聲つき。又姿までも心をつけてよく見る程。何とやらん物凄しき體にては御座なく候か（ワキ）これは珍しい事をお尋ねあるものかな。さやうの謂れなどは方々のよく御存じあるべきに。拙者にお尋ね迷惑仕り候。しかし存ぜぬと申すもいかゞなれば。古き者ども申し傳へたる通り物語り申さうずる。さる程に殺生石の由來を尋ぬるに。まづ天竺よりも起り初めし事なるが。唐土にても數多帝を取り奉り。野干は神通を得たるものなれば。その後この豐秋津洲にも來り烏羽の院の御時。父母も出所も知らぬ宮女の。何時の程よりか來りて上童に宮付き。容顏美麗は宮中に並びなき故。一入君の叡慮に叶ひ片時も君邊を立ち去る事のなかりしが。智惠を計り諸色萬物の起りを尋ね給ふに。一度滯ふる事もなく明かに申し上げ。詩歌管絃經論聖教和漢までも。萬の事を太細によく究め心中に暗き事のなき故。玉藻の前と名付け給ひ。天子の御寵愛淺からざりし時分。晩秋下旬の事なれば月も未だ出でざるに。清涼殿に於て管絃の御遊のありし時。俄かに空かき曇り風吹き來つて。玉殿の燈一同に消える。その時玉藻の前が身より光を放ち。日月の出でたる如く禁中を照らし。それより主上は御惱とならせ給ふ間。博士を召して占はせらるれば。占方を考へて申し上ぐる樣。これは皆玉藻の前が業なり。御祈禱なくては叶ふまじとて。調伏の政を行はるれば。玉藻の前は正しう稲荷（シカク）と現れ下野の國那須野の原へ逃げて行くを。三浦の介上總の介に勅使立つて。かれを平げよとの宣旨を蒙り。兩介は家の面目これに過ぎじと悅び。家の子郎等を引き連れ當國へ下り。こゝかしこを狩れども化生のものにて射られざりしを。種々の計略を以てかの者を退治し。君も壽命長遠にめでたき御代とはなれど。しかしその野干の執心今に殘りて。かやうに大石となつて殺生致すかと存ずる。いづれも利益は同じ御事なる間。此年月の惡心を翻し善心となつて成佛仕るやうに。あの石をちと喝してお通りあれかしと存ずる（シカク）さあらば拂子（ホッス）を參らせうずる。急いで喝しなされて尤もに候。我等もこれにて力を添へ申さうずる（シカク）心得申し候。

装束附（殺生石）		
ワキ	玄翁道人	金入角帽子（沙門） 着附小格子厚板　白大口　水衣 緞子腰帯　掛絡　扇
前シテ	里女	面、増　鬘　鬘帯　襟白赤 着附摺箔　唐織着流
後シテ	玉藻前（狐）	面、小飛出　赤頭　金入鉢巻 襟紺　着附厚板　半切　法被 縞紋腰帯　扇
作物		拂子　一畳臺石

素謡座席順　シテ　ワキ

殺生石

ワキ僧上ゲ　確カリ　次第ツヨク　拍子ニ合

「心を誘ふ雲水の。

浮世の旅に出でうよ　詞寛タリ　「これは玄翁

といへる道人なり。われ知識の床を

立ち去らず。一大事を歎き見

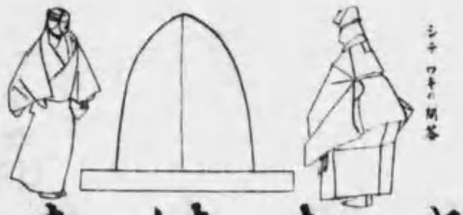
所を開き。終に拂子をうち振つて

世上に眼をさらすこの程は奥州

にゐひ[確カリ]が。都に上り冬夏をも結
ばゞやと思ひ[赤切][道行上ラ]「雲水の身はいづく
とも定めなき。身はいづくとも定め
なき。うき世の旅に迷ひ行く。心の
奥を白河の[赤切]関。結びこめたる下野
や。那須野の原に着きにけり那
須野の原に着きにけり[狂言カゲ]

シテ女詞[閑カニ]
呼掛「なうその石の邊へな立ち寄らせ
給ひそ[確カテ]「そもこの石のほとりへ
寄るまじき謂れのゐか[シテ閑カニ]「それは那
須野の殺生石とて。人間は申すに
及ばず。鳥類畜類までもさはるに
命なし。かく恐ろしき殺生石とも。知ろ
しめされでお僧たちはもとめ給へる

命かな。そこ立ちのき給へ（ワキ）さてこの
石は何故かく殺生をばいたすやらん
（シテ）昔鳥羽の院の上臺に。玉藻の前
と申し人の。執心の石となりたる
なり（ワキカル上）不思議なりとよ玉藻の前
は。殿上の交はりたりし身のこの
遠國に魂をとどめし事は何故ぞ



（シテ）それも謂れのあればこそ昔より申し
習はすらめ（ワキ）御身の風情言葉の末。
いはれを知らぬ事あらじ（シテ）いや委
しくはいさ白露の玉藻の前と
（ワキカル上）聞きし昔は都ずまひ（シテ）今魂は
あまざかる（ワキ）鄙に殘りて悪念の
（シテ）なほもあらはすこの野べの（ワキ）往来

○小謡

の人に（ヨク）あたを（シテ）今、上歌同

に立つ石の。那須野の原に立つ石

の。苔に朽ちにし跡までも。執心を

残し来て。立ち帰る草の原。物凄

き秋風の。梟松桂の枝に鳴き

つれ。狐菊菊の花に隠れ住むこの

原の時しも物凄き秋の夕べかな。

○那須野の原（ウケテスヽリメ）

（拍子三合）

クリ地上（引立テサヲリ）

ツヨク（拍子三合）そもそもこの玉藻の前と申すは。

出生出世定まらずして。いづくの誰

とも白雲の上人たりし身なりしに

シテサシ上

○サ面獨吟

然れば紅色を事とし 同 容顔美麗

なりしかば。帝の叡慮浅からず

シテ上

ある時玉藻の前が智慧をはかり

給へ。一事とどこほる事なし 同 經論

聖教和漢の才。詩歌管絃に至るまで。問ふに答への暗からず「心底くもり。なければとて玉藻の前とぞ召されける。ある時帝は清涼殿に御出なり。月卿雲客の堪能なるを召しあつめ。管絃の御遊ありしに。頃は秋の末。月まだ遅き宵の空の雲の氣色凄しく。うちしぐれ吹く風に。御殿のともし消えにけり。雲の上人立ち騒ぎ。松明とくと進むれば。玉藻の前が身より。光を放ちて清涼殿を照らしければ。光大内に充ち満ちて畫圖の屏風萩の戸。簡の夜の錦なりしかど。光にかくやきて。ひとへに月の如く

なり。「帝それよりも。悩となら
せ給ひ〜かば。同「安倍の泰成占つて。
勅状に申すやう。これは偏に玉藻の
前が所為なりや。王法を傾けんと。
化生して来りたり。調伏の祭ある
べ〜と。奏すれば忽ちに。叡慮もかは
り引きかへて。玉藻化生をもとの身

に。那須野の草の露と。消え〜跡は
これなり。「かやうに委〜く語り給へ。
御身は如何なる人やらん。「今は
何をか包むべき。その古は玉藻の前。
今は那須野の殺生石。その石魂に
てゐなり。「げにやあまりの悪念は。
かへつて善心となるべし。然らば衣鉢

を授くべし。同じくは本體を。二度あらはし給へべし。「あら恥かしやわが姿。晝は淺間の夕煙の立ちかへり夜になりて。立ちかへり夜になりて。懺悔の姿現さんと。夕闇の夜の空なれどこの夜はあかし燈火の。わが影なりと思し召し。恐れ給はで待ち給へと石に隱れ。失せにけりや石に隱れ失せにけり

中入間

ロヰカル上

確カニ

白子三合八

木石心なしとは申せども。草木國土悉皆成佛と聞く時は。もとより佛體具足せり。況んや衣鉢を授くるならば。成佛疑ひあるべからずと。花を手向け燒香し。石面に向つて佛事

をなす。汝元来殺生石問ふ石霊。何れの所より来り。今生かくの如くなる。急々に去れ去れ。自今以後汝を成佛せしめ。佛體眞如の善心となさん。攝取せよ

後シテ狐上ニ入ル
出端「石に精あり。水に音あり。風は大虚にわたる

同ニ正ニ入ル
像を今ぞ現す石の。二つに割

石魂怨ち現れ出でたり

れば石魂怨ち現れ出でたり。恐ろしや

「ワキカル上サリ
「不思議やなこの石二つに割れ。光の内をよく見れば。野干の形はありながら。さも不思議なる仁體なり

シテ
「今は何をか包むべき。天竺にては班足太子の塚の神。大唐にては幽王の后褒姒と現じ。わが朝にては

鳥羽の院の。玉藻の前とはなりたる
なり。詞確カリ われ王法を傾けんと。假に優
女の形となり。玉體に近づき奉れ
ば。惑惱となる。既に御命を取らん
と。悦びをなし。處に。安倍の泰成。
詞
調伏の祭を始め。壇に五色の幣帛
を立て。玉藻に。幣を持たせつ。肝

○仕舞

仕舞ノトキハ逸レ謡ハズ

膽を碎き祈りしかば 同 やがて五體を
苦しめて。やがて五體を苦しめて幣
帛をおつ取り飛ぶ空の。雲居を翔
り海山を越えてこの野に隱れ住む
シテ 中見タリ
「その後勅使立つて。 同 その後勅使立
つて。三浦の介。上総の介兩人に。綸
旨をなされつ。那須野の化生の

者を。退治せよとの勅を受けて。
野干は犬に似たれば犬にて誓古。
あるべしとて百日犬をぞ射たりけ
るこれ犬追物の始めとかや「兩介は
狩装束にて　兩介は狩装束にて
數万騎那須野を取りこめて草
を分つて狩りけるに。身を何と那須

野の原に。現れ出でしを狩人の。追
つつまくつつさくりにつけて。矢の
下に。射伏せられて。即時に命を徒
らに。那須野の原の露と消えても
なほ執心は。この野に残つて。殺生
石となつて。人をとる事多年なれ
ども今逢ひ難き。声法を受けて。

この後悪事をいたす事あるべからずと御僧に約束かたき石となつて。約束かたき石となつて。鬼神の姿は失せにけり。

野宮

世阿彌元清作

梗概

諸國一見の僧（ワキ）都に上り、嵯峨の方に出でて野宮の舊跡を訪ひしに、いとなまめける女性（シテ）忽然として出で來りし程に、如何なる人ぞと問へば、今日九月七日は年々に神事を行ふ日なるに、お僧の來り給ふは憚りあり、疾く歸り給へといふ。僧强ひてその謂れを尋ぬれば、昔光源氏が榊の枝を持ちてこの所に六條御息所を訪ひ給ひしは今日の日なりといひ、もと御息所は前坊に別れさせ給ひて後、光源氏忍び忍びて御通ひありしが、又絶え〳〵となりしかば、世をはかなみ、齋宮にうち添ひて伊勢へ參らんと、この野宮におはしゝなりと語り、その御息所はわれなりと告げて、鳥居の二柱に立ち隱れぬ。（中入）

僧夜もすがらかの御跡を弔へば、六條御息所（後シテ）現れ出で、賀茂の祭の物見に、葵上と車爭ひして辱められし妄執を晴らし給へと乞ひ、昔をしのびて月下に舞の袖を飜しけるが、やがて妄執を捨てて火宅の門を出でけり。

曲柄　三番目　鬘物
季節　九月
稽古順　一級
所　山城國京都市嵯峨野々宮

謡ひ方

源氏物にて、三番目鬘物の内にも尤も品位ある曲にて、位重く、殆んど九番習の定家にも比すべく、前は嵯峨野の黒木の社なる、物さびたる靜寂を現はし、後は車爭の花やかなる面影を寫したれど、總じて幽玄に浮き立ちて謡ふは宜しからず。

△**シテ**　次第の謡ひ出しは、調子を抑へめに物淋しく、しつとりと、サシは閑かに落着いて、下歌は氣を變へて閑かに、上歌は調子高くならぬ樣にしんみりと、ワキとの掛合は品位を保ち優美に、文句に從ひ心附け、サシは閑かに、上端は稍引立て、ロンギは浮かぬ樣に稍さらりめに「われなりと」と閑めて謡ふ。

△**後シテ**　一聲の出は、中吟にて寛たりと、優美に謡ひ出し「如何なる車」と稍かゝつて伸んびりと、以下ワキとの掛合は稍花んなりと「ばつとよりて」と氣を込めて確かりと心持し「昔を思ふ」と極閑かに「野の宮の」とワカは優美に引立てゝ「身の置き所も」以下乘つて品よく閑かに「小柴垣」と抑へめ

にしつとりと謠ふ。

△**ワキ**　三番目の位を保ち、品よく閑かに謠ひ出し「われこの森に」と少し間を取りてしつとりと謠ひ「伊勢の神垣」と改めて閑かに「われこの森に」と詞は閑かに、以下シテとの掛合は稍さらりと「森の下道」より漸次に詰めて「尙々御息所の」とさらりと、待謠伸んびりと淋しく、後シテとの掛合は稍引立てゝ、段々と運ぶ樣に謠ふべし。

△**地**　初同「うら枯の」と調子を抑へて、閑かにしつとりと出で、總じて淋しく心持多し「あらさみし」と心持を附け、クリは稍引立てゝ、サシは閑かの內に運んで、クセは閑かにしつとりと淋しく、上端は稍引立てゝ、ロンギは調子を改めて、浮き立たぬ樣に少し運んで、「亡き身と聞けば」と稍さらりと「去りて久しき」と閑かに「われなりと」と品よく靜かに「夕暮の秋の風」としつとりと淋しく、中入前をとくと閑め、後の「人々轅に」と氣を掛けずかりと出て、以下さらりと運んで「身の程ぞ」と閑める心にて「知られたる」とゆるめ「よしや思へば」より改めて氣を變へ靜めて段々と閑かに「月にと返す」と優美に伸んびりと「影さみしくも」より乘つてしつくりと「庭のたゝ住居」の居は中吟に落し、以下シテとの掛合はシテよりさらりめに、「露うち拂ひ」よりさらりめに段々と運び「りんりん」と寬たり「と」と呂に落し、以下さらりと「夜すがら」としめて「なつかしや」と大きく「こゝはもとより」浮つきりと引立て「いで」とゆるめ「入る姿は」と元へ戻し「又車に」以下段々と閑めて「うち乘て」のうを呂に落し、漸次に閑めて謠ひ納む、此留は他に類なき留なれば心して謠ふべし。

能の異式

合掌留（がつしやうどめ）　―　破の舞の留に鳥居に扇を置き、合掌する形あり、切も形が替る。

語　釋

野の宮　―　大神宮を祭る御役に皇女の立たせ給ふ時、まづ此處に假殿を作りて三年潔齋し給ふを例とす。京都市嵯峨に其舊跡を存す。

黑木の鳥居　―　皮付の木をもて作れる鳥居をいふ。

小柴垣　―　木の枝を以て作れる小さき垣。

火燒屋　―　竈を燒く爲の建物。

桐壺の帝　―　源氏の君の御父。

前坊　―　坊は東宮坊とて皇太子の御殿。

かつらの御祓　―　齋宮御出立の日、桂川に於て御身を淸め給ふ儀式あるをいふ。

しらゆふ　―　祓に用ふる具にて、式終れば川に流し捨つるなり。

鉛鹿川八十瀨の波にぬれ〳〵ず云々　―　御息所より源氏の君におくりし歌なり。

たけの都　―　伊勢の國多氣郡に齋宮の御住居はありたり。

はづかし　―　山城の國乙訓郡にある森の名。

網代　―　網代張にて作れる車。女車なり。

車あらそひ　―　御息所と葵上との競爭、源氏物語葵卷に「祭の日は大殿には物見たまはず、大將の君、かの御車の所あらそひをまねび聞ゆる人ありければ、いといとほしう憂しと思して、猶あたらおもりかにおはする人の、ものに情後れて、すく〳〵しき所つき給へるあまりに、自らはさしも思さゞりけめども」云々とあり。

葵の上　―　源氏の君の正妻なり。

內外の　―　伊勢の內宮外宮をいふ。

火宅　―　法華經第二卷、譬喩品第三に、「三界無レ安猶如二火宅一、衆苦充滿甚可二怖畏一」とあることをいふ。

間狂言

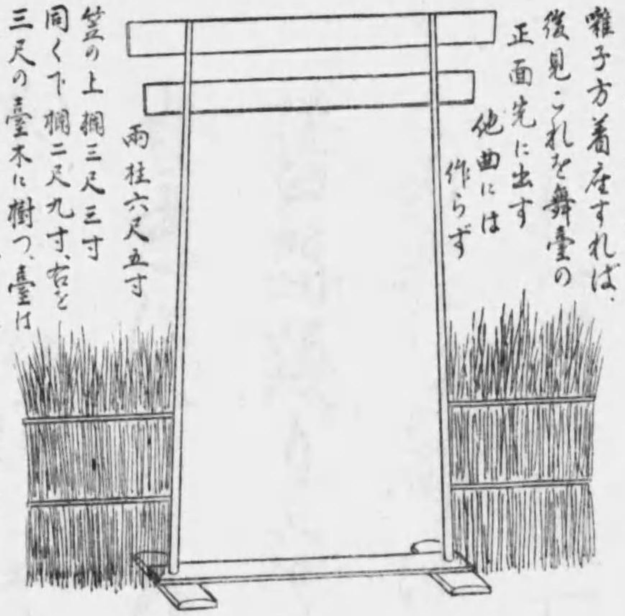
所の者、野宮の由緒を語る。

これは此あたりに住む者にて候。今日は野宮の御神拜なれば。急いで參らばやと存ずる。いやこれなるお僧はいづくより御參りなされたるぞ（此間せりふ常の通り）さる程に野宮御神拜と申すは。伊勢齋宮に御立ちある人の假に移りまします。御精進屋の爲に建て置かれたる所と承る。これにて御身を淸められ。それより桂の祓ひに相竹の都に御座候由承る。然れば古の御息所の御息女。齊宮に立ち給はんとてこの野宮に移らせ給ふ。御母御息所は源氏と御契り深かりしが。葵の上に付きて空しくなり給ふ故に。それより御心よく思し召さる間。息女の齊宮に離れ難しと號して。伊勢へ御下りあるべきとて。これへ御出である。光源氏は御息所の御心辛きものとは思し召せども。さすが又別れ給はん事もいと惜しく思ひ給ひ。此野宮へ訪ひ參らせらるゝに。その折節殊更なる物の音など聞えければ。源氏渡り御座す由聞し召されて。御遊をも止められたると申す。その時源氏の君は榊の枝を折りて。翠簾の內へ差し入れ給へば御息所の御歌に。神垣はしるしの杉もなきものを。如何にまがへて折れる榊ぞと。かやうに遊ばし給へば。源氏の御返歌。少女子があたりと思へば榊葉の。顏なつかしみ留めてこそ折れと。互に詠み交はし御申しあり。それより色々樣々の御恨みどもにて。月も傾けば光源氏は御歸りあり。御息所は都の方名殘惜しく思し召せども。力及ばず伊勢へ御參りなされたるけに候。まづ我等の存じたるはかくの如くにて候（しかく）これは奇特なる事仰せらるゝものかな。さやうに女人の忽然と來り。この所にての子細を語るべき者。こゝ許にては覺えず候が。さては御僧の御心中貴きにより。

古の御息所の御亡魂見みえ給ひ。御雜談なされたると存ずる間。末は急ぎの旅なりとも。今宵は木蔭に御逗留あり。かの御菩提を御弔ひあれかしと存ずる。

鳥居　柴垣

雜子方着座すれば、後見これを舞臺の正面先に出す　他曲には作らず



裝束附（野宮）			作物
ワキ	旅僧	角帽子　着附無地熨斗目　水衣 腰帯　扇　數珠	
前シテ	女	面、若女又ハ深井　鬘　鬘帯 襟白二　着附摺箔　唐織着流 木葉	
後シテ	六條御息所	面、若女又ハ深井　鬘　鬘帯 襟白二　着附摺箔　緋大口　長絹 胴箔腰帯　鬘扇	鳥居

野宮

素謡座席順　ワキ

ワキ　ヒ本

ワキ僧詞　閑カニ

「これは諸國一見の僧にてゝ。われこの程は都にゝゐひて。洛陽の名所舊跡殘りなく一見仕りてゝ。又秋も末になりゝへば。嵯峨野の方ゆかゝくゝ向。立ち越え一見せばやと思ひゝ。これなる森を人に尋ねて

いへば。野の宮の舊跡とかや申しい
程に逆縁ながら一見せばやと思ひい
カル上 ヨワク われこの森に來て見れば。黒木の
拍子二合ハズ 鳥居小柴垣。昔に變らぬ有樣
なり。こはそも何といひたる事や
らんよしよしかゝる時節に參り
あひて。拜み申すぞありがたき

歌 カヘテ 拍子二合 伊勢の神垣隔てなく。法の教への
道直に。こゝに尋ねて宮所心も澄
める。夕べかな心も澄める夕べかな
シテ 次第 花に馴れこし野の宮の。花に馴れ
こし野の宮の秋より後は如何ならん
サシ上 折しもあれものの寂しき秋暮れ
拍子二合ズ て。なほしをりゆく袖の露。身を

○小謡

碎くなる夕まぐれ。心の色はおのづから。千草の花にうつろひて。衰へる身のならひかな（切 拍子三命）（上歌）人こそ知らぬけふごとに昔の跡に立ち帰り（切）○野の宮の。森の木枯秋更けて。森の木枯秋更けて。身にしむ色の清元かへり。思へば古を何と信夫の草衣。（切）

（元ヘ戻シ）きてしもあらぬ假の世に。行き帰るこそ。恨みなれ行き帰るこそ恨みなれ。（口ノ詞）「われこの森の蔭にゐて。古を思ひ。心を澄ます折節。いとなまめける女性一人忽然と来り給へは。如何なる者ぞと問はせ給へ。其方を（シテ）「如何なる人にてましますぞ

こそ向ひ奉らすべけれ。これは古齋宮に立たせ給ひし人のかりに移りまする野の宮なり。然れども その後はこの事絶えぬれども。長月七日のけふは又昔を思ふ年々に。

（閑カノニ 拍子ミ合ハズ）

人こそ知らね宮所を清めぼ神事をなす處に。行方も知らぬ御事

なるが。来り給へは憚りありぞくと く帰り給へとよ

（崩ス 日詞サラリヌ）

いやいやこれは苦しからぬ。身の行く末も定めなき。世を捨人の數なるべしぞてさてこは古りにし跡をけふ毎に。昔を思ひ給へ。謂れは如何なる事やらん

（カル上来 確カニ）

シテ詞（閑カニ ヒカル）

光源氏この所に詣で給ひしは。長月

七日の日けふに當れりその時聊か
持ち給ひし榊の枝を忌垣の内に
さし置き給へば。御息所とりあへ
ず。神垣はしるしの杉もなきもの
を。詞スラリノニいかにまがへて折れる榊ぞと。詠み
給ひしもけふぞかし　ワキ上来　げに面白き
言の葉の。今持ち給ふ榊の枝も。

○小謡

昔に變らぬ色よなう　シテ詞　昔に變ら
ぬ色ぞとは。榊のみこそ常磐の蔭
の　ワキ上来　森の下道秋暮れて　シテ　紅葉か
つ散り　ワキ　浅茅が原も　上歌同　うら枯れの。
草葉に荒るゝ野の宮の。草葉に
荒るゝ野の宮の。跡なつかしきて
にも。その長月の七日の日もげ

に廻り来にけり。ものはかなしや
小柴垣いとかりそめの御住居今
も火焼屋の煙かなる。光はわが
思ひうちにあらん色や外に見えつ
らん。あらさみし宮所あらさみし。

ワキ詞サラリ

この宮所。なほなほ御息所の
謂れ懇に御物語りゆへ

打掛

そもそも

○サシ曲獨吟

この御息所と申すは。桐壺の帝の
御弟。前坊と申し奉りしが。時めく
花の色香まで妹背の心あさから
ざりしに

シテサシ上

○曾て定離の習ひも
とよりも

同

驚くべしや夢の世と。程
なくおくれ給ひけり

シテ中

「さてしも
あらぬ身の露の

同

光源氏のわり

なくも忍びに行き通ふ

「心の末のなどやらん」 同 又絶え絶え

の中なりしに切柏子春 つらきものには

さすがに思ひはて給はず。遥けき

野の宮に。分け入り給ふ御心いと

ものあはれなりけりや。秋の花皆

衰へて虫の聲もかれがれに松吹

く風の響までも。寂しき道すがら

秋の悲しみも果てなし。かくて君

こゝに。詣でさせ給ひつ。情をかけ

て様々の。言葉の露も。色々の御心

のうちぞあはれなる「その後桂上」

の御被ひ 同 白木綿かけて川波の。

身は浮草の寄るべなき心の水に

誘はれて。行方も鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず。伊勢まで誰か思はんの。言の葉は添ひ行く事もためしなきものを。親と子の。多氣の都路に赴きし心こそ。恨みなりけれ。

（ロンギ地上、ゆったりとうたう様サワリ）

げにや謂れを聞くからに。だに人ならぬ御氣色。その名を名のり給へや

（シテ上、用カニ）

名のりても。かひなき身とて恥かしの。もりてやよそに知られましよしさらばその名もなき身ぞと弔はせ給へや

（地上、サワリメ）

亡き身と聞けば不思議やな。さてはこの世をはかなくも

（シテ、用カニ）

さりて久しき跡の名の

（地、カケリメ）

序息所は

（シテ、用カニ）

われなりと

（同、ウケテシタトリ）

夕暮の秋

の風。森の木の間の夕月夜。影幽かなる木の下の。黒木の鳥居の二柱に立ち隠れて失せにけり跡立ち隠れ失せにけり　中入間

ロ半上歌
待謡「かたしくや。森の木蔭の苔衣。森の木蔭の苔衣。同じ色なる草むしろ。思ひをのべて夜もすがら。かの御跡を。弔ふとかやかの御跡を弔ふとかや、

後シテ女中ツヨリ一声「野の宮の。秋の千草の花車。われも昔に。廻り来にけり　ロ半カル上　サリ　ロ半カル上　不思議やな月の光も幽かなる。車の音の近づく方を。見れば網代の下簾。思ひかけざる有様なり。いかさま

疑ふ所もなく。帝息所にてまし
ますかさもあれ如何なる車やらん
シテ詞伸ケト
「如何なる車と問はせ給へば。思ひ出
でたりその昔。賀茂の祭の車爭
ひ主は誰とも白露の
「所狭き
まで立て並ぶる
シテ「物見車の樣々
に殊に時めく葵の上の
「御車とて

人を拂ひ。立ち騷ぎたるその中に
シテ「身は小車のやる方もなしと答へ
て立て置きたる
○「車の前後に
シテ「ばつと寄りて
人々轅にとりつ
きつ人だまひの奥に押しやられ
て物見車の力もなき身の程ぞ
思ひ知られたる。よしや思へば何事

○切迄囃子

も。報いの罪によるも洩れず。身はなほ
牛の。小車の廻りめぐり来ていつ
までぞ妄執を晴らし給へや妄執
を晴らし給へや。シテ中間カニ「昔を思ふ。花の
そで 地上「月にと返す。氣色かな 序之舞
シテワカ上 ○獨吟 ○「野の宮の。月も昔や。思ふらん 舞上
地上 「影さみしくも森の下露森の下

○仕舞 露 シテ中間カニ「身の置き所も。あはれ昔の
地 「庭のたゝずまひ。シテ中大間カニ「よそにぞかはる
地上 「氣色も假なる。シテ中初ヘ心「小柴垣 同 露うち
拂ひ。訪はれ。シテ中間カニ「われもその人。たゞ
夢の世とふりゆく跡なるに誰松虫
の音は。りんりんとして風花ぐたる。
野の宮の夜すがら。なつかしや 破之舞 舞上

キリ上ス

てはもとより忝くも。神風や伊勢の内外の鳥居に出で入る姿は生死の道を。神は受けずや。男やらんと。また車に。ちち乗りて次宅の門をや。出でぬらん次宅の門。

錦木

世阿彌元清作

梗概

諸國一見の僧（ワキ）陸奥の旅に出で、やがて狭布の里に到りしに、夫婦の市人（シテ、ツレ）、女は鳥の羽にて織りたる布、男は美しく色どり飾りたる木を持ちて出で來りし程に、これは何といふ物ぞと問へば、女の持てるは細布とて、胸あひ難き戀にたとへられ、男の持てるは錦木とて、女の家の門に立て、逢ふべき男の錦木は取り入れ、逢ふまじきはそのまゝになし置くなりと語り、昔三年まで錦木を立てたりし男の、錦木とともに築きこめられし錦塚といふに伴ひ行きて、夫婦は塚の内に入りぬ。（中入）

僧夜もすがら讀經して弔へば、夫婦の亡魂（後シテ、ツレ）回向を喜びて現れ出で、女は塚の内にて細布の機を織れば、男は錦木とり持ちてさしたる門を敲き、かくて三年も滿ちぬれば、「錦木は千束になりぬ今こそは、人に知られぬ閨の内見め」と喜びて舞を舞ひけるが、夜も明け行けば、僧の夢はさめて、野中の塚には松風のみ颯々と音づれけり。

曲　柄　四番目（略二番目）
季　節　九　月
稽古順　三　級
所　陸中國鹿角郡錦木村（狭布ノ里）

謡ひ方

重き曲に非ず、船橋の類曲にして、粘らぬ様に戀慕の心を主として、全體に强みを帶び確かりと謡ふ。

△**シテ**　直面の男なれば、次第は調子を抑へずに素直に出で、サシはさらりめに、長ければだれぬ様に、下歌は氣を變へゆるめて、上歌は派手にならぬ程に、ツキ並にツレとの掛合は落着いて、「恨みをもよせ」より互に詰めて、語はさらりと文句に心附け、「あういでいで」とかゝつてはつきりと「夫婦の者は」とツレとの連吟は調子能く閑かに「伴ひつゝ」と抑へて「秋寒けなる」と淋しくすらりめに謡ふ。

△**後シテ**　確かり謡ふと雖も、荒々しからず、出は朗らかに謡ひ出し「今こそは」と氣を變へ大きく「夢又夢に」とたつぷりと「いふならく」以下どつしりと「かはらざりけり」と運んで「恥かしや」と内へ取りゆるめ「けにや昔に」と落着いて「いでいで」とたつぷりと、以下ツレとの掛合は段々と氣を掛け運んで、サシはさらりと、上端は朗らかに「千束になりぬ」

と調子抑へめに「嬉しやな」と氣を變へ朗らかに「舞を舞ひ」と乘つてさらりと「織るは」とよせ「細布の」とたつぷりと謠ふ。

△**ツレ**　次第以下はシテと調子を合せて、一人の處はさらりと後の「いかに御僧」は强吟なれども女の事とて物和く謠ひ、手强くならぬ樣に、總じてシテを助けて輕めに謠ふべし。

△**ワキ**　旅僧なれば、位を取るは宜しからず、次第は長閑に謠ひ出し、名乘はさらりと、道行は伸んびりと、シテ並にツレとの掛合は、シテを助けてさらりと、待謠もさらりと素直に謠ふ、素謠の時はワキツレを略して一人にて謠ふ。

△**地**　初同「錦木は」と氣を掛けさらりと受け「物語は恥かしや」とゆるめ「けにや名のみは」より稍閑かめに「狹布の細道」とさらりと「嵐木枯」と花やかならぬ樣に、淋しみを附け「夫婦は塚に入にけり」の返しを閑め「三年は過ぬ」と强吟にてはつきりと「尾花がもとの」と乘つてさらりと附け「御覽ぜよ」と大きく「きりはたりちやう」と閑かに、クリはさらりと、サシは運び能く、クセは粘らぬ程にさらりと、上端は引立てゝ「錦木は」と別に出して大きく「人に知られぬ」とさらりと締めて「雪をめぐらす」より乘つて以下さらりとこけぬ樣に謠ふべし。

能の異式（小書）

鬱讃盃之舞（あふせはい）　―　後の形が替り「盃の」とツレの前に座り開きたる扇を盃の如く兩手に受けて立ち、常座へ行き、破掛り急の舞となる。

語　釋

錦木　―　袖中抄によりて、錦木細布のいはれを作れり。

旗手も見えて夕暮の云々　―　古今集第十一卷、戀歌一に載す、讀人不知の歌、「夕暮は雲の旗手に物ぞ思ふ天つ空なる人を戀ふとて」とあり。

けふの里　―　希婦とも亦狹布とも書く。秋田縣鹿角郡錦木村。毛馬内驛の前に錦木塚あり。

けふの細布　―　此里より織り出せる烏毛にて織りたる幅狹き布なり。

陸奥のしのぶもぢずり誰故に云々　―　古今集第十四卷、戀歌四に載す、河原左大臣の歌、「陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに亂れそめにし我ならなくに」とあり。歌意は、陸奥の信夫捩摺の模樣の亂れて居るやうに私の心は亂れて居るが、夫れは貴君より外に誰故に心を亂さうと思ふ私ではありませぬ。皆貴君故に亂す心との意。

我からと藻に住む虫の云々　―　古今集第十五卷、戀歌五に載す、典侍藤原直子の歌、「海士の刈る藻にすむ虫の我からと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」とあり。歌意は、海士の刈る藻の中に住むわれからといふ虫の名のやうに、何事も我から仕出した事と了見して自分一人音をたてゝ泣かう、つれない人を決して恨みはせずとの意。

いつまで草の　―　壁に生ふる小さき草の名。枕草紙に、「いつまで草は生ふる處いとはかなくあはれなり。岸の額よりもこれはくづれやすけなり」云々とあり。

衣手の森　―　京都府山城國松尾の東南三町にありしと云ふ。

起きもせず寢もせで夜を云々　―　古今集第十三卷、戀歌三に載す、在原業平の歌、「起きもせず寢もせで夜を明かしては春の物とてながめくらしつ」とあり。歌意は、物思ひに亂れて夜の目も合はず、さればとて起き上りもせず又眠りもせずしてやう〳〵と一夜を明かしては嬉しやと思ふに、又壹は壹で春季の長雨に一日辛氣に眺め暮したとの述懷の意。

夢かうつゝか　―　古今集第十三卷、戀歌三に載す、讀人不知の歌、「君や來し我や行きけん思ほえず夢かうつゝか寢てか覺めてか」とあるを引く。歌意は、昨夜お逢ひ申したやうだが、貴君がお出でくだされたか但しは私が參つたか慌しくお別れ申したので一向に覺えませぬ、必竟お逢ひ申したも夢であつたか正氣でありしや、眠つて居る間の事か覺めて居る間の事か覺えませぬとの意。

流れてはやき月日かな　―　古今集第六卷、冬歌に載す、春道列樹の歌、「きのふといひ今日とくらして飛鳥川流れて早き月日なりけり」とあるを引く。歌意は、過ぎ去つた日を昨日といひ、さし當つた日を今日といひて暮して直ぐ明日を迎へるといふやうに、いつの間にか早年の暮となつた。如何なる事ぞと考へて見れば、飛鳥川の水の早く流れて行くやうに月日を經たとの意。

流れても妹背の中の云々　―　古今集第十五卷、戀歌五に載す、讀人不知の歌、「流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中」とあり。歌意は、川も流れては妹山背山の中に落つる吉野川と隔てるやうに、總て人間の男女の中も長らへて年久しくなれば、何時までも元のやうに睦まじくはなく自然隔たりが出來るは儘ならぬ世相との意。

千束ともよみ　―　詞花集第七卷、戀歌上に載す、藤原永實の歌、「いたづらに千束朽ちにし錦木を猶こりずまに思ひたつかな」とあり。又同上大藏卿匡房の歌に、「思ひかね今日立てそむる錦木の千束も待たで逢ふよしもがな」とあり。錦木は陸奥國の俗に戀ふる人の家にたて、若し逢はんと思ふ人の錦木は千束の後取入ると言へば、かく詠めるなるべし。

錦木は立てながらこそ　―　後拾遺集第十一卷、戀歌一に載す、能因法師の歌、「錦木はたてながらこそ朽ちにけれけふの細布むねあはじとや」とあり。

松の言の葉 ― 松の枝を結びて、我思ふ事の叶はゞ、其時に解かんと誓ふ風俗をいふ。

彼岡に草刈る男 ― 萬葉集第七卷、旋頭歌に、「此岡、草刈小子、然刈、有乍、君來座、御馬草爲」と。和譯すれば、「此岡に、草刈るをのこ、然なかりそね、有りつゝも、君が來ますむ、御馬草にせむ」とあるを、朗詠集に「かの岡」と改め入れたるを引用す。

道芝の露をば ― 狭衣に、「たづぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露」とあるを引く。

松桂に ― 白氏文集に、「巢鳴三松桂一、枝狐藏三蘭菊叢一」とあるを引く。

男鹿の角の ― 新古今集第十五卷、戀歌五に載す、人丸の歌、「夏野ゆく男鹿の角の束の間も忘れずぞ思ふ妹が心は」とあり。歌意は、我が愛する妻のやさしき心を少しの間も忘れず戀しく思ひ居るとの意。

尾花が本の思ひ草の ― 新古今集第十五卷、戀歌五に載す、右衛門督通具の歌、「問へかしな尾花がもとの思ひ草しをるゝ野邊の露はいかに」とあり。歌意は、人を思ひ焦るゝ身の其人の無情に思ひしをれて泣いて居るが、其袖の涙は如何ばかりぞ、さぞや茂からんと其人の問へよといふ述懐の意。

いふならく奈落の底に入りぬれば剎利も云々 ― 慈覺大師の歌なり。奈落は地獄のこと、剎利は印度にて帝王となるべき種族、次に婆羅門とて學問などをする種族、次に毘舎とて商人あり。次に首陀とて農民あり。之を四姓といふ。

かきくらす心のやみに ― 古今集第十三卷、戀歌三に載す、在原業平の歌、「かきくらす心の闇にまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ」とあり。歌意は、誠に昨夜の事は私もかき暮れた心の闇に惑つて居る。夫れ故に夢か現か一向に覺えぬが、斯く相互に知らぬからは其何れであるかと云ふ事は世間の人が定めてくれるとの意。

夕陰草 ― 朝顔の異名。萬代集に載す歌に、「山里の夕かけ草の下露を袖にかけつゝとふ人ぞなき」とあり。

つゞりさせよと ― 古今集第十九卷、誹諧歌に載す、在原棟梁の歌、「寛平の御時きさいの宮の歌合の歌」と詞書して、「秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりすなく」とあり。歌意は、藤袴の袴が秋風で大分綻びたらしい、其證據には其綻びを綴りさせといふ蟋が鳴くわとの意。

妙なる一乘妙典の ― 法華經をさす。

懺悔の姿 ― 前世の罪を悔ゆるための姿。

戀の染木とも ― 六百番歌合に載す、顯昭の歌、「藻塩焼く海士のまてかたならねども戀の染木もいとなかりけり」とあり。

思ひきやしぢのはしがき云々 ― 千載集第十二卷、戀歌三に載す、藤原俊成の歌、「思ひきやしぢのはしがきかきつめて百夜も同じ丸寢せんとは」とあり。これは古今集に、「鶏の鳴のはねかき百羽かき君が來ぬ夜は我ぞ數かく」とあるを寫し誤りしならんか。

錦木は千束になりぬ云々 ― 袖中抄第十八卷にあり。

鶯鶏の盃 ― 盃の名。

間狂言

所の者出で、錦木、細布の謂れを語る。

これは陸奥狭布の里に住む者にて候。今日はもの淋しき折からなれば。錦塚のあたりへ立ち出で心を慰めばやと存ずる。いやこれなるお僧はいづくより御越しなされたるぞ（此間せりふ常の通り）まづ世上に人の夫婦になる中だちは。皆媒といふ事のありて緣を結びけるが。如何なれば陸奥當所の習ひには。曾てさやうの儀はなくして。わが思ふ女の門に錦木を立てし時。逢ふべき夫の錦木をば取り入れ。逢ふまじきをば取り入れず候。印の木なれば色どり飾るを以て錦木とは申し習はす。然れば古この所に田の長のありけるが。眉目よき娘を一人持ちたるを。或若き男の心を掛け印の木を立て申す處に。かの姫取り入れず置きたるを。夫は心の内に存ずる樣。この事曾て人の知らぬに於てはふつと思ひ切り申すべきが。早々男女ともゝ〳〵にその隱れなきに。あれこそ女に疎まれたる者よなどゝありては。生きても効あるまじと思ひ。それより日毎に立てけれど終につれなく置かれたりし程。思ひに焦れ空しうなりつるが。誠に妹背の仲は二世までも契りあらん。程なく姫も相果てしより。二人の錦木ともに塚に築き込め。則ちこれを錦塚とは申し習はす。又細布といふ次第は。昔此所に惡鳥のありて幼き者を取り惱まし候程に。子を持ちたる者はこれを悲み如何がはせんと申す處に。或こざかしき人の申され事に。かやうに怪鳥のありて人を取るには。鳥の羽を布に拵へて着せければ。必ず取り止む由申す間。さやうに致さうずるとてこれをわれ先にと調へ着致させし時。元より鳥の羽にて織りたる布なれば。機張狭くて胸等も合ひ申さぬを。胸合ひ難き戀とは讀まれたると申す。これに付き數多子細のあるとはいへど。先我等の存じたるは斯くの如くにて候（シカヤウ）。これは奇特なる事仰せらるゝものかな。さやうにいづくとも知らぬ女性と若き男の來り。錦塚細布の謂れ委しく語り申すべき者。こゝ許にては覺えず候が。さてはお僧の御心中貴きにより。古の夫婦の者の亡魂現れ出で。言葉を交はしたると存ずる間。暫く是に御逗留ありかの跡を御弔ひあれかしと存ずる。

装束附（錦木）		
ワキ	旅僧	角帽子　着附無地熨斗目　水衣 緞子腰帯　扇　数珠
ワキツレ	従僧二人	角帽子　着附無地熨斗目　縷水衣 緞子腰帯　扇　数珠
ツレ	女	面、連面　鬘　鬘帯　襟赤 着附摺箔　唐織着流　白水衣（細布
前シテ	男	直面　襟浅黄　着附段熨斗目 白大口　掛素袍（又ハ水衣） 繍紋腰帯　男扇
後シテ	男	面、三日月又ハ淡男　黒頭　黒鉢巻 襟縹　着附紅入厚板　半切　法被 繍紋腰帯　修羅扇
作物		山　錦木

素謡座席順　ワシテ　キテレ

ワキ僧　ワキツレ二人　次第　ヨワク　拍子二合

錦木（ニシキギ）

げにや聞きても信夫山。げにや聞きても信夫山。その通ひ路を尋ねん

ワキ詞（サヲリ）

これは諸國（ワウゴク）見の僧にてゐ。われ未（イマ）だ東國（トウゴク）を見ずゐ程に。この度思ひ立ち陸奥（ミチノク）の果てまでも修行（シユギヤウ）せばやと思ひ（オモイ）ゐ

三人道行上来

いづくにも。心とめじと行く雲の。心と
めじと行く雲の。旗手も見えて夕
暮の空も重なる旅衣。奥はそな
たか陸奥の。狭布の里にも着き
にけり狭布の里にも着きにけり

シテ男二人上
次才

狭布の細布をりをりの。狭布の細布
をりをりの錦木や。名たてなる
らん

シテサン上
柏子三合八

陸奥の信夫もぢずり誰ゆ
ゑに。乱れそめにしわれからと

二人

藻にすむ虫の音に泣きて。いつま
で草のいつかさて。思ひを千さん衣
手の。森の下露起きもせず。寝
もせで夜半を明かしては春のなが
めも如何ならん。あさまやそも

いく程の身にけあれば。なほ待つ事のあり顔にて。思はぬ人を思ひ寢の夢か現か寢てか覺めてか。

これや戀慕の。習ひなる（下歌）徒らに過ぐる心は多けれど。身になす事は涙川。流れて早き。月日かな流れて早き月日かな。（上歌）げにや流れては。妹背の中の川と聞く。妹背の中の川と聞く。吉野の山はいづくぞや。こゝは又。心の奥か陸奥の狹布の郡の名にし負ふ。細布の色こそ變れ錦ぞの。千度百夜徒らにぐやしき頼みなりけるぞぐやしき頼みなりける。（ワキ詞）不思議やなこれ

なる市人を見れば夫婦と思しくて。女性の持ち給ひたるは鳥の羽にて織りたる布と見えたり。又男の持ちたるは美〳〵く色どり飾りたる木なり。いづれもいづれも不思議なる貴物かな。これは何と申したる物にてゐぞ「これは細布

とて機ばり狭き布なり「これは錦木とて色どり飾れる木なり。いづれもいづれも當所の名物なり「これこれ名さられへ「げにげに錦木細布の事は承り及びたる名物なり。さて何故の名物にてゐやらん「うたての仰せぢや。名に負ふ

錦ボ細布のそのかひもなくよそまでは聞きも及ばせ給はぬよなう「シテ詞」いやいやそれも御理その道々に縁なき事をば何とて知ろしめさるべき「ツレ二人上歌」見たてまつればせを捨人の恋の慕の道の色に染むこの錦ボや細布の知ろしめさぬは理なり「ワキカゝル上歌」あら面白の返答やな さてさて錦ボ細布とは恋路によりたる謂れよなう「シテ詞」なかなかの事三年までぞ立て置く數の錦ボを日毎に立てく千束とも詠み「ツレカゝル上歌」又細布は機ばり狭くてさながら身をもかくさねば胸あひがたき

○小謡

恋とも詠みて「恨みにも寄せ、「名を、
も立てて、「逢はぬを種と「詠む
歌の上歌同○錦木は。立てながらこそ
朽ちにけれ。立てながらこそ朽ち
にけれ。狭布の細布。胸合はじと
やとさても詠みし細布の。機ばり
もなき身にて。歌物語はづかしや。

げにや名のみは岩代の。松の言
の葉とり置き夕日の影も錦木
の。宿りにいざや帰らん宿りに
いざや帰らん。「なほなほ錦木細
布の謂れ御物語りあへ「昔より
この所の習ひにて。男女の媒には
この錦木を作り。女の家の門に立つ

るしるしの木なれば美しく色どり飾りてこれを錦木といふ。さる程に逢てしべき男の錦木をば取り入れ。逢てしまじきをば取り入れねば。或は百夜三年までも立てしにより つて千束とも詠めり。この山陰に錦塚とてゆ。これこそ三年まで

錦木立てたりし人の古墳なれば。取り置く錦木の數ともに塚に築き籠めて。これを錦塚と申しゆ

ワキ「さらばその錦塚を見て。故郷の物語にゆべし教へて給はりゆへ

シテ「おういでいでさらば教へ申さん。こなたへ入らせ給へとて夫婦の者は先

に立ちかの旅人を伴ひつゝ（同中狭布の細道分け暮らして錦塚はいづくぞかの岡に。草刈る男心〜て人の通ひ路明らかに。教へよや道芝の。露をば誰に問はま〜眞如の玉は何處ぞや。求めたくぞ覚ゆる

シテ上「秋寒げなる夕まぐれ（同カヽ）嵐木枯

村時雨。露分けかねて足引の。山の常陰も物さび松桂に鳴く梟

蘭菊の花に隠るなる。狐栖むなる塚の草。もみぢ葉深めて錦塚は。

これぞといひ捨て〜。塚の内にぞ入りにける。夫婦は塚に入りてけり（中人間）

ワキ三人上歌（待謡）「牡鹿の角の束の間も。牡鹿の角

の東の間も。寢られんものか秋風の。松の下臥疲もすがら。聲佛事をやなしぬらん聲佛事をやなしぬらん

ツレ女上出端当之

しぬらん　いかにお僧。一樹一河の流れを汲むも。他生の緣ぞと聞くものをまして。や値遇のあればこそ。かく宿りする草の枕の。夢ばし

覺まし給へなよ。あら貴の佛法やな

後シテ男上

「あらありがたの御弔ひやな。二世とかねたる契りだにも。さても三年の日數積る。この錦木の逢ひ難き。法の値遇のありがたさよいでいで姿を見え申さん。今こそは。色に出でなん錦木の

地

「三年は過ぎぬ古の

シテ「夢又夢に。今宵三年の値遇に。
今ぞ帰るなれと 地上 尾花がもと
の思ひ草の。陰より見えたる塚
の幻に。現れ出づるを忠賢ぜよ
シテ 中ノリ 「いならく。奈落の底に。入りぬれ
ば。剣刃も首陀も。変らざりけり
変らざりけりあら。恥かしや 地上

首陀も首ノ浄キノマヽ陀ヲ引キ其マヽ廻シサゲもヨウグク

ワキカル上「不思議やなさても古塚と見えつ
るが。内はかやく燈火の。影あき
らかなる人家の内に。機物を立
て錦木を積みて。昔を現すよそ
ほひたり。これは夢かや現かや
ツレ サラリ ヨワク「かきくらす心の闇に惑ひにき。夢
現とは世人定めよ シテ詞 「げにや昔に

業平も。世人定めよといひものを。
夢現とは旅人こそよくよく知ろ
しめさるべけれ　（ワキカル上）よし夢なり
とも現なりとも。はやはや昔を現
して。夜すがらわれに見せ給へ　（シテ）いで
いで昔を現さんと。夕陰草の月の色
夜に（ツレカル上）女は塚の内に入りて。秋の心

も細布の機物を立て。機を織れば
（シテ詞）夫は錦木とり持ちて。閉したる門
を敲けども　（ツレ上木）内より答ふる事も
なく。窓かに音するものとては
（シテ）機物の音　（ツレ）秋の虫の音　（シテ）簡け
ば夜聲も　（ツレ）きり　（シテ）はたり　（ツレ）ちやう
（シテ）ちやう　（上歌同）きりはたりちやうちやう。

きりはたりちやうちやう。機織
松虫きりぎりす。つゞりさせよと
鳴く虫の。衣のためか匂佗びそお
のが住む野の。千草の糸の細布
織りて張らせん（クリ地上ニ引立テサフリ）（袖ヲ合ハズ）げにや陸奥の
狭布の郡の習ひとて。所からなる
事業の。世にたぐひなき有様かな

シテサシ上ー、申しつるだに憚りなるに。なほも
○サシ曲獨吟
○切迫詰子
昔を現せとの。お僧の仰せに従ひ
て。織る細布や錦ぞの。千度百夜を
経るとてもこの執心はよも盡きじ
シテ「然れども今逢ひ難き縁によりて
同妙なる一乗妙典の。功力を得んと懺
悔の姿。夢中になほも。現すなり

○仕舞

クセ（確カニスラリ）

○（拍子三合ヤ）夫は錦ボを運べば女は内に細布の。機織る虫の音に立て〳〵問ふまでこそなけれども。たがひに内外にあるぞとは。知られ知らるゝ中垣の。草の戸ざしはそのまゝにて。夜は既に明けければすごすごと立ち帰りぬ。さる程に。思ひの數も

積りきて。錦ボは色朽ちてさながら苔に埋れボの。人知れぬ身ならばかくて思ひもとまるべきに。錦ボは朽つれども。名は立ちてひて逢ふ事は。なみだも色に出でけるかや。戀の深木ともこの錦ボを詠みしなり（寛タリシテ上ニ云ハ）「思ひきや。榻の

はしがきかきつめて　同　百夜も同じ
ごまろ寝せんと。詠みしだにある
ものを。せめては一年待つのみか。
二年あまりありてはや陸
奥のけふまでも。年くれなゐの
錦ぶは。千度になれば徒らに。われ
も門邊に立ち居り錦ぶとも

に朽ちぬべき。袖の涙のたまさ
かにもなどや見え給はぬぞ。
さていつか三年は満ちぬ。あらつれ
なつれなや。　地上　錦ぶは　千束にな
りぬ。今こそは
地中　人に知られぬ。閨の
うち見め　嬉しやな。今宵鸚鵡の
さかづきの　地上　雪をめぐらす。舞の

袖かな舞の袖かな　黄鐘早舞打上

○仕舞

シテ「舞をまひ。歌をうたひ

シテ「も妹背の嬢立つるは錦ぞ

「織るは。細ぬの〜とりどりさま

ざまの夜遊の盃にうつりて有明の。影恥かしや恥かしや。あさまにやなりなん。覚めぬさきこそ

夢人なるものの。覚めなば錦ぞも細布も。夢も破れて。松風颯々たるあしたの原の野中の塚とぞなりにける。

唐船

外山又五郎吉廣作

曲柄　四番目
季節　不定
稽古順　三級
所　筑前國粕屋郡箱崎

梗概

九州箱崎何某（ワキ）は唐土との船爭ひに祖慶官人といふを捕へて、牛馬の野飼をせさせけるに、はや十三年にもなりぬ。唐土に殘りし官人の子そんし、そいう（子方）父を慕ひ、數の寶に代へて伴ひ歸らんと、遙かの海を渡りて來りたり。祖慶官人（シテ）は日本にて儲けし二人の子（子方）とともに野飼より歸り來てこの由を聞き、絶えて久しき父子の對面に喜ぶこと限りなし。やがて箱崎何某は日本子を跡に留めて官人の歸國を許しに、二人の唐子は急ぎ船に乘らんとすれば、日本子は別れを悲しみ父の袖にすがりてとり留む。官人中に立ちて、恩愛の情去就に窮し、終に巖に上りて海に身を投げんとすれば、唐子日本子ともにとりつきて泣き悲めり。箱崎何某この樣を見て憐愍に堪へず、日本子にも暇をとらすれば、官人は夢かとばかり喜び、父子五人うち揃ひて船にうち乘り、船中喜びの樂を奏しつゝ、歸國の途につきぬ。

謠ひ方

老人の現在物なり、老人物とて無理に調子を抑へ聲を低くするなどの寫實を忌む、捕はれ人の心持、其開放の喜び、四人の愛子の異なる情を能く心に入れ、緩急變化に注意して翫味すべし。

△**シテ**　一聲は寬たりと謠ひ出し「七夕の」と稍引立てゝ「牛牽く星の」と子方と連吟なれど、子方の調子に附かず元の儘にて謠ふ「これは唐土」とサシは氣を變へ抑へて「あら古鄕戀しや」とゆるめ「かくて」と氣を變へさらりめに、以下文句に心附け「老木の枝は」と調子を改めしつくりと、ロンギは寬たりと、ワキとの掛合は殊勝に「あら不思議や」とかけて「やあいかにあれなるは」と少し間を取りかゝつて朗らかに、以下唐子との掛合はかゝつてすらりと「明やせん」と大きく「いかに箱崎殿に」と閑かに「けにけに出船の」とかゝつてすらりと「呼ぶ子もあれば」以下子方との掛合はしつくりと「父ひとり」とたつぷりと、上端はしんみりと「餘りの事の」とか

丶つて閑かに「これは眞か」とはつきりと謠ふ。

△**子方唐子二人**　日本子よりは年長なれど大人ぶらずに、二人能く調子を合せて、朗らかに高くさらりと謠ふ、下歌、上歌は拍子に合ふ所なれば少し閑かに、詞の所は重なる子一人にて謠ふ。

△**子方日本子二人**　能く調子を合せてさらりと、シテと連吟は、シテの調子を離れて高く、ロンギは拍子に合ふ所なれば、さらりと雖も心附けて謠ふべし。

△**ワキ**　餘り位を取らず、謠ひ出し名乘は閑かに落着いて、唐子との掛合は穩やかに、シテとの掛合はさらりと「めでたうやがて」とか丶つて閑かに「暫く」とかけて以下確かりと「よくよく物を案ずるに」と穩やかに「こはそも何の」とすらりと「中々に」と大きく謠ふ。

△**地**　初同「あれを見よ」と調子高めずにすらりと出で、下歌は氣を變へ寛たりと「語り慰み」と朗らかに「春宵一刻」と氣を掛け引立て丶すらりと「納受し給ふか」と閑めて納め「たづきも知らず」とか丶つて朗らかに「たとへば」とゆるめ、クセはすらりと「船にも乘るまじ」と確かりと「既に憂き身を」と運んで「唐土や日の本の」と氣合を掛け進む心にて「さすが」とゆるめ、段々と閑める「ありがたの御事や」と引立て丶さらりと「かくて」より改めて花やかに「面白や」ととくと閑め「陸には舞樂に」より乘つて調子好く、浮きやかに其の意を現はし「急ぎける」と閑めて謠ひ納む。

能の異式（小書）

干之掛之應答（かんのかけのしらひ）―樂の掛りに替の手あり。

語　釋

箱崎―福岡縣筑前國糟屋郡箱崎町。

明州の津―支那浙江州、今の寧波港。

松浦潟―佐賀縣肥前國松浦郡の海面。

牛牽く星―牽牛星のこと。

華山には馬を放し云々―書經、武成に、「歸二馬于華山之陽一、放二牛于桃林之野一」とあるを少し替へて引用す。華山は支那陝西省關中道華陰縣にあり。

桃林―支那河南省河洛道靈寶縣以西潼關迄を云ふ。

松原―筑前國にあり。箱崎附近より博多へかけて千代の松原とて廣き松原あり。古歌に、「波あらき汐干の松のまつらがた島よりつゞく海の中道」とあり。

わらはな―童名又は幼名。

春宵一刻―蘇東坡の詩句に、「春宵一刻値千金」とあるを引く。

大和撫子―秋咲く野生の撫子をいふ。卽ち日本子の譬喩。

十念―念佛十返すること。

諸天―諸天善神の意。

間狂言

ワキの從者。及び唐船の舟子。

（ワキ）太刀持「御前に候（いかん）長つて候。やあ〳〵如何に祖慶官人。今日も牛馬を曳き出だし野飼に參られよとの御事なり。構て其分心得候へ〳〵。○（子方）舟子「御前に候（子方）長つて候。いかに案内申し候　太刀持「誰にて渡り候ぞ　舟子「此所にて箱崎殿の御館（みたち）はいづれにて候ぞ。敎へて給はり候へ　太刀持「則ち此屋の內にて候　舟子「祖慶官人は未だ存生にて候か　太刀持「なか〳〵一段息災に御入り候。さて是はいづくより御出でにて候ぞ　舟子「その祖慶官人が子にそんしそいうと申す兄弟。父御未だ存生に候はゞ數の寶に替へ歸國せうずる爲に。唐土明州の津より此土に渡つて候　太刀持「箱崎殿へこの由を申さうずる間。それに暫く御待ち候へ　舟子「心得申し候　太刀持「如何に申し上げ候。祖慶官人が子にそんしそいうと申す者。父未だ存生に候はゞ數の寶に替へ歸國せうずる爲に。唐土明州の津よりこの浦に着きて候。箱崎殿に對面ありたき申し候（いかん）心得申し候。最前の人の渡り候か　舟子「是に候　太刀持「御對面あらうずるとの御事にて候間。此方へと御申し候へ。　舟子「心得申し候。さあらばかう御通り候へ。○（ワキ）太刀持「御前に候（ワキ）長つて候。いかに祖慶官人に申し候。野飼より歸られ候はゞ。裏の門より御入りあれとの御事なり。構て其分心得候へや。○舟子「いかに申し。追風がをりて候間急ぎお舟に召され候へ、

唐船

作物	シテ	子方	子方	ワキ	裝束附（唐船）
	組織官人	日本子二人	唐子二人	箱崎某	
船帆	面、阿古父尉又ハ朝倉、小牛尉 尉髪　襟淺黄　着附小格子厚板 茶水衣　緞子腰帯　扇　鞭 手綱　後ニ無紅唐團扇	襟赤　着附摺箔　縫箔腰卷 縫腰帯　扇　鞭　手綱	襟赤　着附紅入厚板　白大口 側次　編紋腰帯　扇	梨子打帽烏子　白鉢卷　着附厚板 上下長直垂　込大口　小刀 扇	

素謡座席順

ワキ　唐子　日本子　ワシテ

ワキ侍詞　閑ダケニ雅カリ

かやうにい者は。九州箱崎の何某にてい。さても一年唐土と日本と船の爭ひあつて。日本の船をば唐土に留め。唐土の船をば日本に留め置きてい。某も船を一艘留め置きてい。その船に祖慶官人

と申す者を留め置きてゐがはや、十三回になりゐ。某は牛馬をあまた持ちてゐ程に。かの祖慶宮人に申しつけ野飼をさせゐ。今日も申しつけばやと存じゐ

唐子二人上ニ一セイ（ヨワク 柏子合ハズ）「唐土船の揖枕。夢路程なき。名残かな（唐子サシ 寺上）これは唐土明州の津に。

そんそういうと申す兄弟の者、二人、さてもわが父宮人は。一年日なり本の賊船に捕はれ。きのふけふとは思へども。十三回にはやなりぬ。餘りに父の戀さに。未だこの世にまゝまさば。今一度對面申さん（歌カヘテ 中ハカメニ）と思ひ立つ日を吉日と船の纜（柏子二合）

解きはじめ（赤切）上歌 明州河をおし渡り。明州河を（元へ点シ）おし渡り。海漫々と漕ぎ行けば。はや日の本もほの見えて。心筑紫の果にある（元丸）忍び〳〵夫を松浦潟（赤切）波路遥かに（元へ点シ）行く程に。名にのみ聞き〳〵筑紫路や箱崎に早く。着きにけり箱

崎に早く着きにけり（ワキ詞 確カニ）（狂言 シカヾ）「唐土の人（唐子ソンシサラリ）のわたりゆか」「これにゆ。祖慶官人（ニンイマ）来だ存生（ジヤウ）にて。箱崎殿（ハコザキドノ）に召し使はれゆ由承りゆ程に。數の寶（タカラ）に代へ連れて歸國（コク）仕るべきため に。唯今この所に渡りてゆ（ワキウケテ確カニ）「さんば祖慶官人は来だ存生（ジヤウ）にてゆ。唯今

物詣として御出でゝ。暫くそれに
御待ちゝへ。御帰りゝはば引き
合はせ申しゝべー　唐子ソシサフリ「さらばこれに
待ち申さうずるにてゝ
シテサシ上歌　柳ハメスラリ　一声　拍子ニ合ハズ「いかにあれなるわらんべども。野飼の
牛を集めつゝ。はやはや家路に急
ぐべし　日本子二人サフリ「かゝる業こそ物憂けれ

シテ一ト　気カケシアリ　シテ「よゝれのみか天の原　セイハナバタラ「七夕の。
たゝへにも似ぬ身の業の　ラシテ　日本子三人サフリ「牛牽
く星の。名ぞしるき　日本子三人サフリ「秋咲く花
の野飼こそ　三人シアイ「老のそゝろの。慰め
コヽヽヽ　甲　シテサシ上　ヒルヲ女ハ柳ヘメ　なれ　寺上　これは唐土明州の津に。祖
慶宮人と申す者なり。われ圖ら　詞確カリメ
ざるに日本に渡り。牛馬をあつかひ

草刈笛の。高麗唐土をば名に
のみ聞きて過ぎし身のあら故
郷恋しや。（詞気ヲカヘ）かくて年月を送る程
に二人の子を持つ。又唐土にも二
人の子あり。かれらが事を思ふ
時は。それも恋しく。これもいと
ほし〜。一方ならぬ箱崎の。二人の

○小謡

子供なかりせば（下歌中シツトリカヘテ）老木の枝は
雪折れてこの身の果はいかなら
ん。（上歌地）あれを見よ。野飼の牛の聲
聲に。（元ノ長シ）野飼の牛の。聲ぐに子ゆゑに
物や思はん。況んや人倫に於て
をやわが身ながらも愚かなり
わが身ながらも愚かなり。（下歌中ヒラカヘリカメ）いざや

家路に帰らんいざや家路に帰らん（日本子三人ヨミキル）「いかに父御よ聞しめせ。さて住み給へ唐土に。牛馬をば。飼へやらん御物語りいへ（甲シテ上）「なかなかなれや唐土の。華山には馬を放し。桃林に牛をつなぐこれ花の名所なり、（日本子三人上）「さて唐土と日の本はいづ

れ優りの國やらん。委しく語り給へや（甲シテ上）「愚かなりとよ唐土に。日の本を喩ふれば。唯今尉が牽いて行く。丸牛が一毛よ（日本子三人上）「さほど樂しむ國ならば。痛はしやさこそげに。愁しく思しめすらめ（甲シテ中）「いやとよ方々を。設けて後は唐衣。婦國

の事も思はずと語り慰み行く程に。嵐の音の少なきは松原や素になりぬらん箱崎に早く着きにけり、いかに祖慶官人。何とて遅く帰りてあるぞ　さんば餘りに多き牛馬にて疲れは程に。さて

遅く罷り帰りてい　心もにてい。又尋ぬべき事のい隠さず申すべきか　これは今めかしき事を承りいものかな。何事にてもあれ申し上げうずるにてい　さておこと

は唐土に二人の子を持ちてあるかさんば子を二人持ちてい　その名を

そんゝそいうと申すか　シテ「あらネ
思議や。何とて知ろしめされてい
ぞさやうに申しい　ワキ「そのそんゝ
そいう。汝来だ存生の由を聞き。數
の寶に代へ連れて帰國すべき
ために。唯今この所に渡りてい
シテ「確カリこれは思ひもよらぬ事にていもの

かな。さてその船はいづくに滞在いぞ
ワキ「此方へ来りいへ。あれにかゝりたる船
こそかの兩人の船にていへ　シテ「確カリげに
これは某が船にていへ　ワキ「さらば對面
しいへ　シテ「餘りに見苦しくい程に。引き
繕ひて給はりいへ　ワキ「心得申しい物著
シテ「やあいかにあれなるは唐土に留め

○小船

置きたる二人の者か　唐子二人上来「さんば童名そんしそいうなり」「これは夢かや夢ならば」唐子二人「所は箱崎」「明けやせん」同　○春宵一刻その値千金も何ならず子程の寶よもあらじ。唐土は心なき。夷の國と聞きつるに。かほどの孝子ありけるよと

日本人も隨喜せり。たゞもや箱崎の。神も納受給ふか。「いかに申しい。追風がありてい急ぎお船にのるされいへ」「いかに箱崎殿へ申しい。追風がありてい程に船に乗れと申しい御暇申しいべし」「めでたうやがて歸國いへ」日本子二人「あら悲し

やわれらをも連れて、御出でゝへ
「シテ」げにげに出船の習ひとてはたと
忘れてあるぞ此方へ来りゝへ
「ワキ」暫く。狂慶宮人の事は力なき事。

この幼き者どもは。この所にて生まれ相續の者にて候程にいつまでも

某召し使はうずるにてあるぞ此

方へ来りゝへ
「唐子三人上来」あら情なの御事や。

大和撫子の花だにも。同じ種とて唐土の唐紅に咲くものを。薄くも濃くも花は花。情なくこそゝへとよ
「唐子三人上来」時刻移りてかなまじ。急ぎお船にめされよとはや纜をとくとくと
「シテ」呼ぶこもあれば

日本子二人

「とり留むる「中に留まる　父ひと

り　同　たづきも知らず泣き居たり。

身もがな二つ箱崎のうらめしの

心づくしやたとへば。親の子を思ふ

事。人倫に限らず。焼野の雉子夜

の鶴。梁の燕も皆子ゆゑこそ物

思へ　況んやわれらさなきだに。

あすをも知らぬ老の身の。子ゆゑ

に消えん命は何なかなかに惜し

からじと「今は思へばとにかくに

同　船にも乗るまじ留まるまじと。

巖にあがりて十念し既に憂き

身を投げんとす。唐土や日の本の

子供は左右にとりつきて。これを

いかにと悲しめば。さすが心もよわ
よわとなりゆく事ぞ悲しき

ワキ詞 雄カニ
「よくよく物を案ずるに。物のあ
はれを知らざるは。たゞ木石に異
ならず。殊更出船の障りなれ
ば。はやはや暇とらするぞ。とく
とく帰國を急ぐべし シテカタテ「餘りの

事の不思議さに。更に眞と思は
れず ワキサアリ「こはそも何の疑ひぞや。當
社八幡も照知見あれ。偽り更に
あるべからず。とくとく船に乗り
給へ シテ上歌 雄カニ気アカケ「これは眞か ワキ詞「なかなかに

同 ウケテサアリ「これ丈 拍子三合ハヤ
○ありがたの御事や。眞に諸天納
受して。この子をわれらに與へ給へ

○切迫雜子 拍子三合

敬まつて唐人は

かありがたや。かくて餘りの嬉し
さに。時刻を移さず。暇申して唐人
は。船に乘りおし出だす。悦び
の餘りにや。樂を奏し舟子ども。棹
のさす手も舞の袖。をりから波の
鼓の舞樂につれて面白や

樂

陸には舞樂に乘じつ。陸には舞樂

をりから波の鼓の

○獨吟
○仕舞

キリ上ヨワク

に乘じつ。名殘おしてる海づら
遠く。なりゆくまくに。招くも追風。
船には舞の。袖の羽風も。追風とや
ならん。帆を引きつれて。舟子ども。
帆をひきつれて。舟子どもは。悦び
勇みて。唐土さしてぞ。急ぎける。

帆をひきつれて

複製禁止
權利所有

昭和九年四月十日納本
昭和九年四月十五日發行

訂正著作者　廿四世　觀世左近

發行兼印刷者　東京市神田區錦町一丁目十番地　檜常之助

發行所　東京市神田區錦町三丁目十番地
振替東京三五五二番、電話神田二五二六番
檜書店

京都店　京都市二條通麩屋町東北角
振替大阪三六一八番、電話上二一九〇番

禰木奥書

唐船

十三番

終